



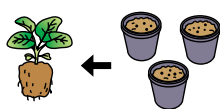
カリフラワー（アブラナ科アブラナ属）

カリフラワーの生育適温は15℃～20度といわれ、耐暑性、耐寒性のある野菜です。夏まき・秋冬取りが一年で最も作りやすい時期で、温暖地では7月中旬～8月下旬が種まき期です。

【品種】カリフラワーは花蕾（からい）ができるには、茎葉の大きさがある程度の低温が関係し、中生品種は早生品種に比べ、より進んだ生育と、より低い温度が必要です。そのため、長い間の収穫を楽しむには品種の使い分けが必要です。早生品種では「バロック」（サカタのタネ、「スノークラウン」（タキイ種苗）、「雪まつり」（武蔵野種苗園）など、中生品種では「輝月」（野崎採種場）、「スノードレス」（タキイ種苗）などがあります。茎葉と花蕾がコンパクトな「美星」（サカタのタネ）、スティック状に花茎が伸びる「カリフローレ」（トキタ種苗）など、ユニークな品種もあります。

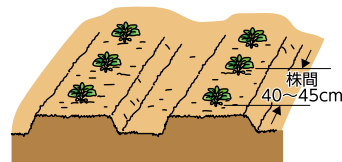
【苗作り】直径7.5～9cmのポリポットを使い1ポット当たり4～5粒をまき、子葉展開時に密生部を間引き、本葉2～3枚で1株に間引き、本葉5～6枚まで育てます。128穴のセルトレイでは1穴2粒まき、間引いて本葉3～4枚まで育てます（図1）。育苗期間中は、防虫ネットのトンネル被覆で害虫の飛来を防ぎます。

図1 苗作り



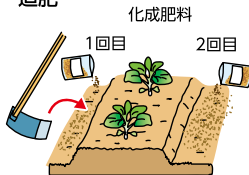
畝幅70～80cm、深さ15～20cmの溝を掘り、この溝1m当たり化成肥料（NPK各成分10%）100g程度と堆肥2kgを施し、土を戻してよく混ぜて畝を作ります（図2）。

図3 植え付け



【追肥】植え付け20日後ごろに畝の片側に化成肥料を畝1m当たり50gくらいまいて、土寄せします。その20日後ごろに畝の反対側に同量を施用します（図4）。

図4 追肥



【病害虫の防除】ヨトウムシ、コナガなどが多いので「トアロー水和剤CT」などで駆除します。

図5 日よけ



【収穫】花蕾が見えたら、花蕾に日焼けや汚れが付かないように、外葉の1～2枚を内側に折って花蕾に載せます（図5）。花蕾が12cm以上の大きさになり、つぼみの表面が緻密なうちに、外葉を6～7枚付けて切り取ります（図6）。

図6 収穫



栽培計画

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
春まき 初夏どり 栽培			○		●	●						
夏まき 秋・冬どり 栽培						●	●	●	●	●	●	●

○ 種まき □ フレーム内加温育苗 ● 植えつけ ▲ 収穫

【肥料】育苗期間がやや長いので、肥料を切らさないように育てるのがポイント。植えつけから1か月ほど経ち、隣の株と葉が触れ合うくらい成長したら、株間に化成肥料を与えましょう。花蕾ができはじめたころ、2回目の追肥をしてください。

花蕾の表面の一部が紫色になった場合はアントシアニンという色素で、温度が低温になると紫色になるアブラナ科野菜特有の現象です。ので病気ではありません。

【変色対策】食べる部分の花蕾に日が当たると黄色く変色してしまうため、白い品種は花蕾ができただ直後からまわりの葉を1～2枚内側に折り曲げ、遮光すると白い花蕾ができます。収穫する時も外葉で覆って光にあてないようにしましょう。

カリフラワーは日当たりがよく、水はけのよい環境で栽培しましょう。連作を嫌うので、カリフラワーを含むアブラナ科の野菜を1年以上育てていない場所を選んでください。ブロッコリーの苗とよく似ているので混ざらないように注意しましょう。

JAグリーン
津店が
カリフラワー
栽培のポイント
教えます！

JAグリーン津店
グリーンアドバイザー認定
城博一